

及川平治の保育観と今後の保育の展望

Heiji Oikaw's View of Childcare and Future Prospects for Childcare.

三友玲子* 加藤房江**

要旨 及川は、その後の教育者の倉橋惣三らの「児童中心主義保育」に影響を与えた人物の一人であり、「児童中心主義保育」は、現在の保育所保育指針や幼稚園教育要領の基底をなす保育観として、影響を与えている。及川の保育観は、自分の生い立ちをベースとした、明石女子師範学校附属幼稚園の子ども一人ひとりを大切にしたい児童中心主義とプラグマティズムの伝統を発展的に継承しつつ、科学的根拠に基づいて、理論と実践の往還がなされていた。我々保育に関わる者として、研究結果を適切に理解したうえで実践に活かすという態度が求められ、保育全体を見通した保育思想を踏まえることが重要である。本稿は、現代の子ども一人ひとりの個性を大切にしたい主体的な活動を行うための環境を通じた保育や保育方法など、保育を総合的に捉える視点をもつことの重要性から、及川の現代に通ずる保育観を整理し、保育の知恵である保育思想を学ぶことで、現在の教育・保育の展望に迫った。

【キーワード：及川平治 保育観 カリキュラム】

1. はじめに

本稿は、及川の生涯を文献から概観し、その人となりを示しながら、保育観に関わる記述を中心に整理していく。また、保育観をたどり、子どもの自由を重んじる保育法や科学的根拠に基づいた理論と実践の往還、現代の保育に通ずる組織のリーダーシップを探る。今日の保育の目指す子どもの自発性や創造性を伸ばす保育の課題を、保育の知恵である保育思想を学ぶことで、現代の保育現場に照らし合わせ考察したい。

かつて、学校という場で教師が行う教育とは、すべての子どもを対象としたものではなかった。遅い離乳を済ませ、身の始末ができるようになると厳しい共同体の中に繰り込まれていった。産業革命以降、親の仕事を見様見真似で学び、後を継ぐといった時代から、新しい仕事や工場などで働く人が増えていく時代へと変化していった。そこでは、すべての人が読んだり、書いたり、計算でできることが必要とされた。世界中で小学校が広まった当時は、教授主義的な教育であり、読み書き、計算を教えることが中心であった。ここでは、子どもたちは教師が与える内容を覚えたり、与える問いに答えたりするという教育法が広まっていった。19 世紀後半に公的教育制度が確立されていく

中での学校教育は、このような教育の画一的で形骸化した教育だった。こうした教育は、子どもの興味関心を中心とした教育ではなく、学びとは子どもたちが興味をもったり、疑問をもったり、さらに探求したいと思う内容を取り上げるという児童を中心とした教育に展開していくべきではないかといった新教育運動が起こった。日本の新教育運動の代表の一人が、及川平治（1875（明治 8）年～1939（昭和 14）年）であり、戦前の新教育運動を代表する教育の理論家、実践家でもある。及川は、アメリカのカリキュラム論を日本に導入し、個性重視、生活経験を大切にしたい教育を提唱し、兵庫県明石女子師範学校の附属小学校と幼稚園（現神戸大学附属幼稚園・小学校・以下、明石附小、明石附幼）でその実践を開発した。その実践には、現在でいう栽培や、フィールドワーク、振り返りの話し合い、生活活動などが含まれていた。

現在、子どもの興味関心、実際の生活を起点とした教育が大切にされている。2018（平成 30）年改定の幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の総則の教育（及び保育）の基本において、「教師（保育教諭）は、幼児（園児）の主体的な活動が確保されるよう幼児（園児）一

* 埼玉純真短期大学 こども学科 助教

** 埼玉純真短期大学 こども学科 准教授

人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師（保育教諭等）は、幼児（園児）と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児（園児）一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」と謳っている¹⁾²⁾。2018（平成30）年の保育所保育指針において、「指導計画においては、保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。また、具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切にして適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにすること。」と指導計画について謳っている³⁾。幼稚園、保育所、認定こども園の保育内容の統一が図られ、幼児教育を行う上での共有すべき事項も示されている。現代の保育は、よりアクティブに活動しながら学び、活用する力を育むことが子どもたちに期待されている。及川の保育観は、明治から昭和初期にかけて、日本の新教育運動においてアクティブ・ラーニングの萌芽がみられる。目の前の子どもに対して、科学的根拠に基づき、一人ひとりの個性を重視し、生活体験を大切にした教育のより実践的な取り組みである。

Ⅱ. 及川平治の生い立ちと明石附小

及川平治は、1875（明治8）年3月28日、宮城県栗原郡柳町川南八木東32番地に農家の次男として誕生した⁴⁾。12歳の時に父親を亡くしたため暮らしぶりは貧しく、小学校の授業料を支払えず悩んでいた及川は、勉学に励みたいという思いは強かったが、残念ながら小学校を中退せざるを得なかった。及川は勉強を続けたいという思いを小学校の先生であった細川牧之介に相談した結果、「私の自宅で勉強を続けてはどうだろう。」と声をかけられ、再び勉強ができることとなった。喜んだ及川は、毎日のように細川先生のもとへ通った。学校での勤務を終えた後、夜に自宅で、しかも無償で勉強を教えることに感謝した及川は、いっそう勉強に励んだ。及川の熱心さに心打たれ、全力で支えた細川先生から「君はこれからの新しい時代の教師として十分な素質があ

る。若柳の小学校で働いてはどうだろう。家計の支えにもなると思う。」と言われ、ここから平治の教育に携わる人生が始まった。16歳の春のことだった⁵⁾。

及川は、これらの幼少期からの経験をベースに挑戦意欲や粘り強さを兼ね備えており、教員としての素質が見出されたと推察する。それに加え、それを支える細川先生の度量の大きさと愛情が、後の及川の教育・研究に大きな影響を与えたと考えられる。この後18歳で宮城県尋常師範学校に入学し1897（明治30）年に同校を卒業、すぐに母校の附属小学校の訓導となった。

1900（明治33）年には宮城県名取郡茂ヶ崎高等小学校の校長となったが、2年後の1902（明治35）年の秋には東京遊学を志し職を辞して上京、東京市本所尋常高等小学校の訓導として勤務する傍ら、正則英語学校に入学して英語力をつける一方で、政治経済、英語、ドイツ語、哲学、教育などを独学で学んだ⁶⁾。1903（明治36）年2月には『新教育学』⁷⁾を熱海安吉と共著で出版している。1904（明治37）年に東京市本所明德尋常小学校の首席訓導となり、翌1905（明治38）年には文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験（文検）に合格して師範学校教員免許状を取得した。さらに、1906（明治39）年に『如何に歴史を教ふ可き乎』⁸⁾を出版した。

1907（明治40）年に宮城尋常師範学校時代の恩師である藤堂忠次郎の推挙により、明石附小主事になった。当時33歳の若さであった。同年11月には『如何に地理を教ふ可き乎』⁹⁾を出版している。及川の人生の節目節目で、彼を支えたり、導いてくれる存在が居た。それは、及川の日頃の努力や人間性、教育に向かう姿勢に惚れ込んで、未来を託し、支えたい存在であったからなのだろうと推察する。

Ⅲ. 明石附小での分団式動的教育法の研究と実践

明石附小に主事として就任した及川は、能力や家庭環境の差による児童の個人差に学校教育はいかに対応すべきかという問題意識を持つようになった¹⁰⁾。これは自身が勤務した宮城で学年の違う子どもが一つのクラスで学ぶ「単級学級」を担当した時、子ども達から「学校はいやな場所ぢゃ」という言葉を聞き、児童に自発的な学習活動をさせることが重要であると認識したことや、

東京で公立の小学校に勤務した経験からである。また、この頃のほとんどの子どもたちが、家の労働力として手伝いをしたり、ほかの家に雇われて子守をしたりして、学校に通えなかったこともあり¹¹⁾、不就学児童のための出張教育「天幕子守教育」に取り組んだ¹²⁾。学校に来ることができない子どもの教育に携わる中で、子どもが背負っている「境遇」の差に直面したことや、年度末に成績不良のため進級できない児童が13名あり、及川は自ら子どもたちのために個別教育を行った¹³⁾ことが契機となって、「劣等児」救済を急務として全校的な取り組みを始めた。また、「劣等児」の救済のみならず、彼等を生み出すところの従来の教育方法の欠陥であった個別教育の欠如の重大性を認識した¹⁴⁾。及川を中心に全校が取り組んだのは「個人教授法」であった。ただし、及川は習熟度別のクラス編成を否定し、学級内における分団教授によって個々の児童の能力に応じた指導を工夫することを訓導たちに要求した。また、及川は、卒業予定の尋常科6年生と高等科3年生が2名ずつ2日間「学僕」として及川の業務を補佐する制度を実施した。このような授業運営の工夫や学校改革は、教師の目の前にいる児童一人ひとりの現実に向き合う中で及川と訓導たちが生み出したものであり、それらが明石附小の教育方針の3綱領「為さしむる主義の教育、実験室制度、分団式教育」にまとめあげられた¹⁵⁾。この及川の教育理論が明石附小教育方針として明確にされたのは、1909（明治42）年の4月からのことであった¹⁶⁾。翌1910（明治43）年に『全国付属小学校の新研究』¹⁷⁾という書物が出版され、その中に「為さしむる主義による分団式教授法」と題する報告書を及川が発表し、明石附小が全国的に注目をあびることとなった。

明石附小は、1912（明治45）年に教育方針を「分団式動的教育」という名称に表現しなおし、新しい時代に即応する教育のあり方を探究していくことになった。その実践・研究の過程が、指導者である及川平治の教育理論の構築過程にもなっていた¹⁴⁾。1912（大正元）年の暮に出版された『分団式動的教育法』¹⁸⁾の序文に「とくに余の感謝すべきは、わが附属小学校訓導諸君の熱心なる研究によって小著の資料を供給せられたる労である。わが附属校が分団式教育を採用してより、たゆまずうまず研鑽ここ数年、討議研究のため会合

を重ねること百十数回、燈を点じ、空腹を凌ぎ、夜の十二時にいたって閉会することもしばしばあったのである。寸暇あれば直ちに火鉢を囲んで実験の結果をたがいに報告しあったのである。もしそれ、分団式教育法が広くおこなわれて学校教育の効果を増大することあらば、その績者は著者にあらずしてわが附属校訓導である。」¹⁹⁾と記しており、全校をあげて熱心に教育研究を行っていたことがうかがえる。この書物はベストセラーとなってたちまち二十五版を重ね、多くの教師たちに読まれ、明石附小は新教育の実践校として全国から参観者が訪れるようになった²⁰⁾。1915（大正4）年には『分団式各科動的教育法』²¹⁾が刊行され、明石附小は対象教育の実践校として注目され、年間1万人を超える参観者が訪れる新教育の中心的存在となった²²⁾。当時の教育者や訓導らは、及川が考えたように、目の前の子どもが背負っている「境遇」の差が学業成績に影響することや自分の「境遇」を切り開くためには、基礎学力が必要なこと。そのためには子どもに自発的な学習活動をさせ、基礎学力を身に着けることを目的とした教育法や個別教育の重要性を痛感していたのではないだろうか。

そのような中、学校をあげて試行錯誤し、分団式教育法の研究に取り組む教育について研究するため、全国から参観者が訪れるようになったと思われる。

IV. 明石附幼における新しい保育の実践

及川は、学校教育に力を注いだ一方で明石附幼においても新しい保育を実践していた。

1907（明治40）年に明石附小と同時に明石附幼主事にもなった及川は²³⁾、幼稚園保育においても小学校と同じく「なすことによって学ぶ」、「為サシムル主義」の保育であったと久保²⁴⁾は及川平治²⁵⁾の中に記している。及川の幼稚園保育は、生活と学習の統一という基本的なねらいを掲げ追及しているが、次第に考え方が発展している。

1. 明治の終わりから大正初期

及川の幼稚園の保育は、当時のフレーベル主義保育に対する批判から始まっていた。²⁶⁾

「保育方針並ニ幼稚園内規」という資料には、「附属幼稚園内規」、「保育ノ方針」、「幼稚園生活」、「当園保母座右ノ銘」、「家庭トノ連絡」、「幼

稚園家庭連絡内規」,「家庭ノ心得」,「週番保母事務」,「幼稚園歌」と、幼稚園の運営と保育の実際にわたって必要なことをほぼ網羅した、細部までゆきとどいた内規であった²⁷⁾。子どもの保育に直接関係する「保育ノ方針」は、(一) 幼児ヲシテ健全ナル身体ノ發育ヲ遂ゲシムルコト、(二) 幼児ノ心情ヲ涵養シ且ツ習慣ヲ得シムルコト (三) 以上ノ目的ヲ充分ニ達セシメ心身ノ完全ナル発達ヲ計リ以テ家庭教育ヲ補ヒ併セテ完全ナル学校教育ヲ受クルニ適当ナラシメントスの3つの大綱からなっており、とくに (一) において明石附幼の保育方針が躍如としている²⁸⁾。幼稚園保育のねらいとして、子どもの発達の自然順序にしたがって身体活動が重んぜられ、この時期に過度に精神を刺激することは、将来の完全な発達を妨げるし、身体にも精神にも不幸をまねき、不具の人にしてしまうので、幼児期には必ず身体の保育を主眼とすることと書かれている²⁹⁾。このような保育方針を単なるねらいとして終わらせることなく、実現するために明石附幼の保育は戸外での遊びや旅行・園芸・体格検査(健康診断)をして、健康第一に新しい保育内容や方法を取り入れていた。(二)の心情教育においても従来行われてきた、保育者が自己の感情の円満につとめ、幼児の模倣性を利用して事例模範によって感情や意思を陶冶するという方法のほかに、積極的に「作業」を取り入れることによって道徳的品性を確立しようとする方針をとった³⁰⁾。この時期の幼稚園の生活内容は「保育事項」・「生活ニヨル保育」の2つにわけられていた。「保育事項」とは、今日でいうところの保育領域・保育項目を意味しており、明石附幼では、既に文部省が示した4項目に新たな5項目を加え、会集・園芸・旅行・遊嬉・談話・手技・唱歌・観察・整理の9項目となっていた³¹⁾。明治42年度の保育日誌によると³²⁾、のびのびと子ども本位の保育が行われていたことがわかると久保によって著されている。会集では及川や保母が子どもたちと朝のあいさつを交わし、戸外保育や小旅行・見学などをさかんに行って、社会や自然の様々な事柄を実地観察のかたちで学習していた(図1参照)。会集とともに伝統的な保育形式として手技が残っていて、豆細工・粘土細工・紙細工・縫取などにたよりながら、一方で、どのようにしたら子どもの自発性や創造性を活かし伸ばすことができるか、実生活と関連付づけて、感動をともなった

作成活動ができるかに苦心があったようである³⁴⁾。整理という保育事項は、毎日の園生活の終わりに子どもたち自身で保育室や園庭を整理整頓することを意味している³⁶⁾。

「生活ニヨル保育」として、服装・食事があげられているが、この時期には「保育事項」と「生活ニヨル保育」の関係も不明で、まだ明石附幼が出発したばかりであり、この後の大正・昭和にかけて発展していくこととなる³⁸⁾。しかしながら、明治末期ごろに子どもたちが、実生活と関連付づけて、感動をともなった作成活動ができるかに苦心したことは、かなり進歩的な考えであると思われる。子ども理解の重要性や子どもが豊かに育つために環境づくりにも配慮されていることがみてとれる。

図 1

足		遠		方ビ遊ノデ園公		題目
6 5 4 3 2 1		帰リ道 昼食ノ時ノ注意 意目的地ニツイテノ注意 車中ニオケル注意 目的地ニツイテノ注意 遠足時刻 遠足時刻 遠足時刻		3 2 1		保育綱目
〇遠足ニツイテオ話ヲキク		〇遠足ニツイテオ話ヲキク		〇公園ヘハドンナ時ニ行クカヲ話シ合フ		映ノ要点
〇時刻ニ遅レヌヤウ		〇時刻ニ遅レヌヤウ		〇芝生ニハ勝手ニ入ラヌコト		保健ニ関スル要点
〇歩道ヲ歩クキハ列ヲ正シテ左側通行スルコト		〇歩道ヲ歩クキハ列ヲ正シテ左側通行スルコト		〇池ニ石ヲ投げ入レヌコト		備考
〇汽車電車ハ人ガ降りテカラ乗ルコト		〇汽車電車ハ人ガ降りテカラ乗ルコト		〇先生サヨウナラト告ゲテ別レルコト		
〇窓カラ顔ヤ手ヲ出サヌコト		〇窓カラ顔ヤ手ヲ出サヌコト		〇紙屑ノ始末ヲスルコト		
〇合図ヲヨクキ分ケルコト		〇合図ヲヨクキ分ケルコト		〇忘レモノヲセヌ様ニスルコト		
〇途中菓子、果物ヲタベヌコト		〇途中菓子、果物ヲタベヌコト		〇先生ノ指示ニシタガヒ勝手ナトコロヘユカヌコト		
〇夜ハヨク休ムコト		〇夜ハヨク休ムコト		〇芝生デ思フ存分元氣ニ遊ブ		
〇心身ノ鍛練		〇心身ノ鍛練		〇池溝ニハマラヌヤウ		
〇父兄ハ通知書ヲヨク見ルコト		〇父兄ハ通知書ヲヨク見ルコト		△此ノ季節ハ百日咳ハ、はしか等ノ小児病ノ流行スル時ナレバヨク注意スルコト		
〇家庭ヘノ注意ト服装		〇家庭ヘノ注意ト服装		〇間食ヲ多く持タサヌ様質素ニスルコト		
〇適当ナル場所デ解散シ勝手ニ途中カラ帰ラヌコト		〇適当ナル場所デ解散シ勝手ニ途中カラ帰ラヌコト				

保育案：車を利用して遠足に行ったことがわかる。
日本幼児保育史 第四巻 フレーベル館 1978 年より転載

2. 海外訪問とカリキュラム改造・仙台市教育研究所の初代所長時代(大正中期から昭和初期)

1925(大正14)年3月1日、及川は文部省から海外出張の命を受けて教育視察の旅にでた。1926(大正15)年には帰国するが、その間欧米9か国を訪問して各国の教育課程改造の動向を詳しく調査してきた。特にアメリカのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ(以下TCと略す)では新しいカリキュラム構成を学んだ³⁹⁾。及川のカリキュラム論はアメリカに起こったカリキュラム論争の影響を受けていると言われており、明石附小の「生活単位のカリキュラム」もTCの実験学校を参考にしていたと橋本は記している⁴¹⁾。また一方で、昭和初期から明石附幼においてもTC実験幼稚園の影響を受けて「生活単位の保育カリキュラム」の研究が始まったとされている。橋本が記しているように、明石附小・明石附幼では、アメリカから帰国した及川を中心に新カリキュラムの理論研究とその実際教育を施設ごとに全職員が全勢力を打ち込んで、訓導と保姆は互いの研究成果を共有しつつ研究を進めていた。幼稚園の保姆と小学校の訓導とが一緒に行っていた職員会議において、及川が「テストニツイテ」や「学級経営」などを題目とした講話がなされ研究が進み、1927(昭和2)年4月5日には「研究教授順序」が決められて、保姆と訓導の研究発表および研究授業の批評会が合同で行われた⁴²⁾。このように、及川が中心となり、及川に主導されつつも、明石附小・附幼ではカリキュラム開発を訓導や保姆が主体となっていた。小学校、幼稚園という所属を超えて研究が行われ、情報共有や情報交換をし、議論が交わされ、幼小連携が行われていたことがうかがえる。

1929(昭和4)年には「カリキュラム改造全国講演会」を開催、1933(昭和8)年6月には「新カリキュラムに精神に基づく実際教育」を主題とした授業公開も行った⁴³⁾。これら及川が行ったカリキュラム改造に関わる実践や研究は継承され、発展を遂げ、保育史においても大きな業績を残したと考えられる。

およそ30年もの長い間、明石附小、同幼稚園の主事を務めた及川は、1936(昭和11)年3月に退職し、仙台市教育研究所の初代所長となった。ここでも及川は地域の教育事情に対応すべく科学的調査研究を行った。(1). 社会生活の基本様

式をとって生活大単位のカリキュラムを作り、特に産業方面のカリキュラムを作って仙台市の消費都市を生産都市へ変ずること、(2). 郷土調査を行って市民の道徳的水準を高め、単なる学都でなく真の文化都市を建設すること、(3). 適切な保健カリキュラムを作って市民の体位向上を図ること等を目標とする仙台市教育改造計画及びカリキュラム構成に努力した。1939(昭和14)年1月1日に他界するまで、東北農村の貧しい生活現実を土台とした子どもの認識と生活を高めるため尽力した⁴⁴⁾。

V. まとめ

本邦で出版されている「保育原理」の教科書において、及川が保育に携わる歴史上の人物として名前はあるものの活躍されている姿が詳細には記載されていない書籍も多い。また、名前すら出ていない書籍もある。しかし、調べていく中で、大正期から昭和初期における新教育運動の中で「分団式各科動的教育法」を提唱し、欧米教育視察後、独自のカリキュラム改造論を展開した実践家として、素晴らしい功績をあげていたことに大変興味をもち、今回、及川について取り上げた。及川の保育観を辿りながら、保育の知恵である保育思想を探り、現代に活かす手がかりはないものか考察した。そこで、生涯について文献から、人となりを示し、保育観に関わる記述を中心に整理しながら、現在の教育・保育の展望に迫った。

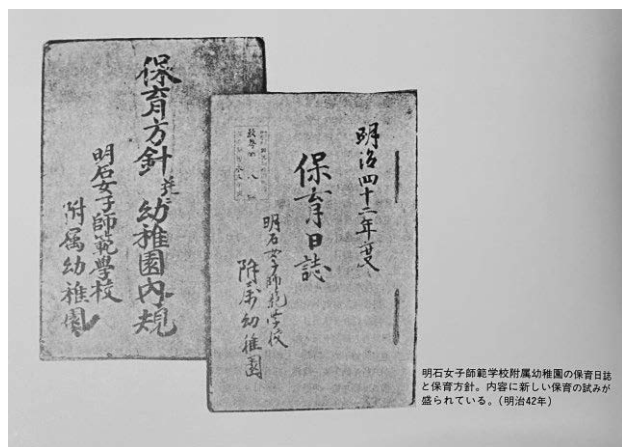
及川の向上心と保育観の原点は、宮城県旧栗原村の農家の次男坊として生まれ、早くに父を亡くし、代用教員として働くことからスタートした。そこでの、初めての実践の場が、東北の極貧の農村の子どもたちであった。子どもたちは、経済的に窮迫し、文化的にも遅滞した状況の中で学習の意欲さえもっていなかった⁴⁵⁾。このことは強烈で決定的な影響を与えたものと推察する。また、明石附小・明石附幼の主事として赴任した年の終わりに成績不良のため進級できない生徒を出してしまった。これらの出来事により、学業遅滞児を生み出す教育を批判し、根本的な学校改革の必要性を感じた⁴⁶⁾。子どもたちが背負っている社会背景、課題解決には、基礎学力を身につけ、自ら生活を切り開いていくしかない。このことが及川の全生涯を支えた強烈なエネルギーとヒューマニズムの源泉が、現場で開花したのではなかろうかと、久

保が推察している⁴⁷⁾。また、及川は、師範学校卒というレベルの学歴であり、自分の学歴にコンプレックスを抱いていた。それをバネに人一倍努力し、高学歴の者に負けまいとする向上心が高い⁴⁸⁾。及川の教育にかける情熱とそれを支える人々に応えレベルアップしていったのである。

また、大正期に豊かな保育実践が生まれた背景には、大正デモクラシーの中で起こった児童文化運動により、児童文化財が充実してくる。日本独自の子どものための歌や物語が創作される中、日本独自の教育・保育実践がされてきた。

しかし、日本幼児保育史第三巻⁴⁹⁾によると「自由な保育を重視していた松本幼稚園⁵⁰⁾でさえ自由遊びということばが出てくるものの、保育内容の項目としては出てきていない。大正期の多くの幼稚園では一斉保育をしていたことを裏付けている。」とある。及川の保育実績では、このような幼稚園の動きのなかでも、とくに自由保育を始めた点で注目されるものとして、明石附幼があげられている。この幼稚園は、1904（明治37）年に創設されたが、「生活ニ由ル保育」を重視した進歩的な行動学習を行なった。そして理論と実際から、自由保育のはじまりと考えられる注目すべき保育を行なっており、幼児を相互に楽遊させることを重んじ、個性観察簿記入についても工夫している。この附属幼稚園は、「保育方針並ニ幼稚園内規」を作り、これによって運営されていたが、その内容は非常にすぐれており、明治30年代のわが国の幼稚園保育の優秀性を思わせる（図2参照）。「保育方針並ニ幼稚園内規」の内容は、各項目が、理論と実践にわたって、詳しく説明されている⁵¹⁾。

図2



写真集 幼児保育百年の歩み

日本保育学会 ぎょうせい 1981年より転載

中でも注目したいのが、及川の優れたリーダーシップ力である。及川のカリキュラム研究では、訪米以前から着手しているが、明石附幼においてプロジェクト法を用いた保育カリキュラムを実践している。小学校の訓導と幼稚園の保姆とで研究に取り組み、幼稚園からカリキュラム改造の試みが始まっていた⁵²⁾。及川自らが、訓導や保姆たちに研究し続ける姿をみせ、押し付けの研修ではなく、目の前の子どもたちに基点を合わせて「理論と実践の往還」を探究し続けていった。橋本は⁵³⁾、「及川は「指導を与える」のではなく、「感化」することにより同じ目標に向かわせていった。「感化」は「外的圧力」によってではなく、内発的な意識態度が起きたことを自覚した表現である。及川の学校経営においては、経済効率や教授効果ではなく教師自らが「自律的学習者になる」「経験」が重視されていたと考えられる。」とある。学校と幼稚園の合同研究会では、及川の優れたリーダーシップのもと保姆や訓導たちが多くの研鑽を積んでいく姿が伺え、全国からもたくさんの教育者が訪問して学びたい魅力ある授業だったことが推察される。

今回、及川の人となりを示しながら、及川自身がどのようにしたら、子どもの自発性や創造性を伸ばせるか試行錯誤し、家庭との連携・指導や小学校との連携等、現代に通ずる子どもを中心とした主体的な活動を大切にする保育がみえてきた。また、カリキュラム研究や開発から研修に至る、小学校の訓導や幼稚園の保姆に対して、内発的な意識態度で研鑽する意識を育んだ優れたリーダーシップに迫ることができ、現代の園の経営における手本となる姿だと考える。及川は、その後の倉橋惣三らの「児童中心主義保育」に影響を与えた人物の一人としてあげられており⁵⁴⁾、保育を学ぶ学生や保育者の保育観として、影響を与えている。これは、現在の保育所保育指針や幼稚園教育要領の基底をなす考え方である。

現在筆者が園の巡視や講演依頼を受ける中で、子ども一人ひとりの個性を大切にしたい主体的な活動を行うための環境を通した保育に迫りたいと日々努力する保育者の様子を肌で感じている。ここは明石附幼の姿と重なるところがみられる。

また、及川の保育観を辿るなかで、現在の保育に活かせることを探っていくと、園全体で同じ目標に向かい、それぞれの環境の中で、目の前の子

どもたちの変化していく発達を読み取りながら、保育者も考え、記録し、試行錯誤していく姿勢が求められる。しかし、それらを目標に掲げ、口で言うのは容易いがどう実践していったらよいか課題となっている現状も見受けられる。

質の高い保育をしていくためには、園を導いていく優れたリーダーシップの重要性も読み取れ、リーダーとしての保育理論の確立と実践的な指導が欠かせないとする。各園を担う優れたリーダーシップから育まれる保育者一人ひとりの自発的な意識や態度で、子どもの育ちや良さをみつけ、議論、訂正を繰り返すこと。職員会議やメモを使った連携のあり方以外にインフォーマルなところでも子どもの育ちのエピソードを持ち寄り、会話を重ねることで保育の質を支え、今子ども達はどんな力が育っているのかを語り合う必要がある。職員会議においては、いつも決まった連絡については、回覧するなどして本当に語り合う必要がある内容に集約した会議にする。エピソード記録に基づいた話し合いについても全員集まることは難しい場合は、集まれる保育者で気軽に進め、その方法や雰囲気に関全体で慣れていくことも必要である。また、ITを活用して時間の効率化を図り、発言に対しても決して否定せず、話しやすい雰囲気を作ることが重要である。このような話し合いを重ね試行錯誤する中で、子どもの発達や興味・関心に沿った環境作りができるようになり、今度は子どもを観察・記録することに時間が割けるので、保育も楽しく楽になっていくのではないかと考える。そこには、保育者自身の常に研鑽する姿勢やモチベーションの維持が求められる。

現代は、保育を行う施設での機能や業務量が拡大しており、保育者の疲労や疲弊感が蓄積していることも指摘されている。時間の効率化以外にも、人的資源にも余裕を持つことも重要になってきている。それを実践している園等は、上手に職員配置を行い、保育者の新人教育にも力を入れ、しっかりと育てており、退職者も少ない傾向にある。今まで以上に保育者自身の意識の改革を進め、仕事に対して、時間的な効率化を図り、保育者への負担軽減をしていくことは必須である。それに加え、保育者の地位や処遇の改善、保育環境の整備やキャリアパスの充実が喫緊の課題である。

私たち教員も、多くのことを学生に教授していく中で、学生自らが疑問に感じたことを考え、探

究していく姿勢を育てていくことは、現代の教育にも通じる重要な態度であると感じている。現代の様々な研究は、保育に対して多くの有効な情報を提供している。保育に関わる者には、研究結果を適切に理解したうえで実践に活かすという態度が求められる。そのためには、保育全体を見通した保育思想を踏まえることが重要である。保育思想は歴史のなかで積み重ねられてきた保育の知恵である。保育思想を学ぶことで、子どもの発達だけでなく、社会背景、人間関係、母子関係をはじめとする保育方法など総合的に保育をとらえる視点をもつことができる。これには、保育思想を、日々の保育に応用していくといった姿勢が望まれる。学生たちが、教育原理や保育原理を学ぶことを通して、子どもたちが主体的・対話的で深い学びをしていくための基礎がためをすることの一層の重要性が増している。

謝辞

論文を作成するにあたり、協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省. 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 2018, p26.
- 2) 内閣府. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館 2018, p27.
- 3) 厚生労働省. 保育所保育指針解説 フレーベル館 2018, p45.
- 4) 及川平治 創業六十年記念出版 世界教育学選集 69 分団式動的教育法 明治図書出版株式会社 1972, 解説 p.318.
- 5) みやぎ先人集第二集 未来への架け橋 及川平治 2018, 3, p.9.
- 6) 沖田行司 及川平治 人物で見る日本の教育【第2版】ミネルヴァ書房 2015, p.207-214. p.207.
- 7) 及川平治 熱海安吉 新教育学 1903.
- 8) 及川平治 如何に歴史を教ふ可き乎 育成会 1906.
- 9) 及川平治 如何に地理を教ふ可き乎 育成会 1907.
- 10) 沖田行司 及川平治 人物で見る日本の教育

- 【第2版】ミネルヴァ書房 2015, p.207-214. p.208.
- 11) みやぎ先人集第二集 未来への架け橋 及川平治 2018, 3, p.10.
 - 12) 沖田行司 及川平治 人物で見る日本の教育 【第2版】ミネルヴァ書房 2015, p.207-214. p.208.
 - 13) 14) 木下繁弥 及川平治の教育方法論と教育実践の展開 教育学研究 1967, 34 (1) p.18-27. p.18.
 - 15) 沖田行司 及川平治 人物で見る日本の教育 【第2版】ミネルヴァ書房 2015, p.207-214. p.209.
 - 16) 及川平治 創業六十年記念出版 世界教育学選集 69 分団式動的教育法 明治図書出版株式会社 1972, 解説 p.319.
 - 17) 金港堂編輯所 全国附属小学校の新研究 1910, 5.
 - 18) 及川平治 創業六十年記念出版 世界教育学選集 69 分団式動的教育法 明治図書出版株式会社 1972.
 - 19) 同上書 序 p.7 解説 p.321.
 - 20) 久保いと 及川平治の幼稚園保育 (一) 幼児の教育 1970, 69 (1) p.64-71. p.66.
 - 21) 及川平治 分団式各科動的教育法 弘学館書店 1915.
 - 22) 沖田行司 及川平治 人物で見る日本の教育 【第2版】ミネルヴァ書房 2015, p.207-214. p.211.
 - 23) 20) と同様
 - 24) 久保いと 及川平治 (人でつづる保育史) 幼児の教育 1977, 76 (4) p.9-15. p.9.
 - 25) 26) 同上書 p.11.
 - 27) 久保いと 及川平治の幼稚園保育 (一) 幼児の教育 1970, 69 (1) p.64-71. p.67.
 - 28) 同上書 p.68.
 - 29) 久保いと 及川平治 (人でつづる保育史) 幼児の教育 1977, 76 (4) p.9-15. p.11-12.
 - 30) 久保いと 及川平治の幼稚園保育 (一) 幼児の教育 1970, 69 (1) p.64-71. p.69.
 - 31) 久保いと 及川平治 (人でつづる保育史) 幼児の教育 1977, 76 (4) p.9-15. p.12.
 - 32) 久保いと 及川平治の幼稚園保育 (一) 幼児の教育 1970, 69 (1) p.64-71. p.70.
 - 33) 31) と同様
 - 34) 同上
 - 35) 久保いと 及川平治の幼稚園保育 (一) 幼児の教育 1970, 69 (1) p.64-71. p.71.
 - 36) 久保いと 及川平治 (人でつづる保育史) 幼児の教育 1977, 76 (4) p.9-15. p.12.
 - 37) 同上
 - 38) 35) と同様
 - 39) 久保いと 及川平治の幼稚園保育 (三) 幼児の教育 1970, 69 (3) p.48-55. p.48.
 - 40) 及川平治 創業六十年記念出版 世界教育学選集 69 分団式動的教育法 明治図書出版株式会社 1972, 解説 p.334.
 - 41) 橋本美保 明石女子師範学校附属幼稚園における保育カリキュラムの開発過程: アメリカ進歩主義の幼小連携カリキュラムの影響を中心に 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 2009, 60, p.39-51. p.39.
 - 42) 同上書 p.45.
 - 43) 及川平治 創業六十年記念出版 世界教育学選集 69 分団式動的教育法 明治図書出版株式会社 1972, p.334.
 - 44) 木下繁弥 及川平治の教育方法論と教育実践の展開 教育学研究 1967, 34 (1) p.18-27. p.24.
 - 45) 久保いと 及川平治研究 一生活と学習をめぐって— 日本保育学会大会研究論文集 1975, 28, p.107-108.
 - 46) 久保いと 及川平治研究 一児童観と教育を中心に— 日本保育学会大会研究論文集 1977, 30, p.166.
 - 47) 45) と同様 p.108.
 - 48) 木村栞太 八大教育主張講演会にみる及川平治の「実践家」としての自負 教育基礎学研究 2015, 13, P107-115.
 - 49) 日本幼児保育史 第三巻 日本保育学会 1978, P.64.
 - 50) 49) と同様 P.64. 松本幼稚園は、もともと有名な開智小学校の附属として開設されたものである (明治20年4月1日)。大正時代、開智小学校は気分教育をするなど自由教育の盛んな学校であり、松本幼稚園でも小学校的な日課を廃止して、自由な保育を重視したと言われているが、その松本幼稚園でさえ、大人数の一斉保育をしていた。

- 51) 日本幼児保育史 第二巻 日本保育学会
1979, p.210-211.
- 52) 橋本美保 明石女子師範学校附属幼稚園にお
ける保育カリキュラムの開発過程 ―アメリ
カ進歩主義の幼小連携カリキュラムの影響を
中心に― 東京学芸大学紀要 総合教育学系
2009, 60, p.43-44.
- 53) 橋本美保 明石女子師範学校附属小学校のカ
リキュラム改革と学校経営：及川平治のリー
ダーシップを中心に 東京学芸大学紀要 総
合教育学系 2021, 72, p.19.
- 54) 佐伯一弥ら 改訂版 Work で学保育原理
2019, p.96-97.